



## 名ピアニストとその音楽 No.1

—ルービンシュタイン—

その1

野村光一

昭和49年春期研修会講義録より

去る5月6日、50余年に亘る楽壇生活の一大集約とも言べき御著「ピアニスト」を音楽之友社からお出しになった野村光一先生を迎え参加者からのリクエストによる名ピアニストについて、いろいろとお話を伺った。その学識の深さ、御体験の豊かさからくるお話は、参加者一同深く感銘した。会場に集えなかった方々にも、このお話をおわかしたく誌上に御紹介する次第である。

なお、夏期研修会の折も野村光一先生に特にお願いし講演していただいた。

これからお話し致しますのは、どうも専門のピアノ技術に関する講座とは全く関係のない、いわばピアノ音楽漫談みたいなものであります。私の即興的なお話なのでみなさんの身にはならないかもしれませんが、悪しからず、その点、ご了承下さい。

私、若い頃から大変、音楽が、特にピアノが好きでございまして、永い間、一音楽ファンとして音楽を聴いてまいりましたので、名ピアニストに関する思い出話は実に沢山あります。ですから、しゃべっておりますと、これだけの時間でとても足りません。そこで皆様の方から興味をお持ちのピアニストを挙げて下さいませんか。「誰々の話をしろ……」と言って下さった方が、こちらとしても話をしやすいのです。もちろん私の聞いた限りでの事ですが……かなり昔のことでも結好ですから……

(会場で、二、三手が挙がり、「ルービンシュタイン」「プライロフスキー」の希望がでた)

ルービンシュタイン

はい、それでは始めにルービンシュタインについてお話し致します。

私は、有名なピアニストで個人的に接触した方々が沢山あります。もちろんしない方の方がずっと多いのですが、やはり個人的に接触した方の方が私としても親しみがありますし、話を聞いておりますと、その人の演奏がより良く解かるような気がいたします。私ごく最近ボリーニに会いました。そしてその演奏にも、大変感激致しました。コンチェルトと独奏会の前に行ったのですが彼はちょっと変な人で、長く沈黙しており近ごろやっと活動し出したため、それまでに聞く機会が一度もなく、もっぱらレコードだけでした。ついでに申しますが、レコードというものを皆さんよくお聞きになり、その価値評価も高くなっておりますが、私、他の事は存じませんが、少なくともピアノに関する限り、そのピアニストの本当の特色、実力はレコードでは解からないというのが私の永い間からの実感でありまして、結局は実演を聴いてみないとはっきりした事は解らないということを最近思うようになりました。したがって、これから私のお話し致しますことは、レコードは参考で、実演に接した限り

におけるところの私の印象になりますので、その点もご了承下さい。まず最初にルービンシュタインであります……。

今も中しましたように、私のピアニスト感は、個人的接触、社会的風評……といった背景がありますので、純然たる音楽論ではございません。またそれなら批評をお読みになればよろしいのでありまして、その人の輪廓を知るためには、それらすべてを含めないと、その演奏家の持っている特徴はわかりませんから、そういう意味で雑談的にお話し致します。

ロンドンでのこと

ルービンシュタインは今90才ぐらいでしょう。ですから現在の現役のピアニストとしては、最高の年長者であります。ところで私は若いころから、いやもっと前の子供の時から非常にピアノが好きでありまして、大学を出ても夢中でした。そしてイギリスに3年間、第一次大戦直後ですが、ロンドンに滞在したのです。というのは今でもそうですが、ロンドンは音楽家のマーケットだからです。特に大戦直後でしたから、いろいろな音楽家が、目白押しにまいりました。その時分、コルトーだとかラフマニノフ……特に最も幸なことにブゾーニの演奏会を聞きました。そういうすばらしいチャンスにめぐまれ、大家の演奏が耳の中にこびりついてなかなか離れませんでした。

その中にルービンシュタインもロンドンにやってきたのですが、その当時、コルトーだとかラフマニノフの中にあつて無名でした。実力はあつたのでしょけれど第一線の人ではなかつた。私もロンドンで彼の演奏会を聞き逃がしてしまったのです。

ある日、ロンドンの街中で友人に会いました。私の友人には音楽悪友が沢山おりまして、例えば太田黒元雄だとか堀内敬三は私の仲間なのですが、ちょうどその時、太田黒さんがロンドンに来て、偶然ボツンと会っちゃったんです。そしたら「きみルービンシュタイン聞いたか?」って言うんですよ。「いや、ルービンシュタインなんて名まえも知らない。どんな人なんだい」と聞きましたら、彼は現代音楽を弾くことが非常に上手だ、特にフラ

ンスの印象派の音楽、それとスペインの現代音楽……そういうものを弾く事に関しては彼ほどの人はいない——ということを通りの中で太田黒さんはしゃべるので。それで私は、ああ惜しいことをしたなと思いました。当時はフランスの印象派、ドビュッシーやラベルが20世紀の初めの作曲家であり、そういう人の作品を手がけることは、例えば今でいうとシェーンベルクの作品をとり上げるのと同じように、新しやがりでなかったら手がけないものなんです。その上、スペインの現代音楽というのは、つまりアルベニスとかパエリアというのは、フランス印象派の影響を受けて作曲したのでありますから、同じグループに入っているのですけれど、フランス印象派に比べますと、いわば出店みたいなものでありますから、これはなおさら弾く人はそういなかった。その名手だというのですから、これは惜しい事をした、おそらく私の想像では、これはピアノの音色が非常に現代風で、しかも原色のといましようか、赤だとか黄色だとか、すっきりした色、そんな音色をかけたピアノだと、この話から想像したのです。しかし私の滞在中にはどうとルビンシュタインはまいますでませんでしたので、私は帰ってきてしまったのです。

#### 1936年初来日の時

それから10数年後、あっ、私の拙著がありますので申し分けありませんが参考させていただきませんが（といわれ先生の御著「ピアニスト」をあけられる）1936年に日本に初めてまいりました。私は1923年に帰ってきたのですから13年後になりますね。その頃になりますとルビンシュタインは大家に成っており、欧米でも非常に名声がさかんで、日本になかなか来なかったのです。ようやく来た。

その時の印象ですけれども当時は、まだオーケストラが（今のN響）がございませんで、その前身の新交響楽団が東京における唯一の大交響楽団でした。その演奏会でしばしばこういった一流の有名な人を招いては会を催したのですが、その演奏会を聞きに行き、ピアノコンチェルトの印象が非常に強く残りました。もちろん独奏会も聞きにいったのですが、そっちの方はどっか消えて無くなってしまい、新響の伴奏によるコンチェルトが非常に印象強いのです。

その時弾いたのは、今思い出しますと、一つはブラームスの2番コンチェルト、もう一つはチャイコフスキーの有名なやつですね。この二つを弾いたのですけれど、大変テクニックの鮮やかな人で、音がとってまきれいにそろっている人、そればかりではなく、何というすがすがしい音なんだろう、というのが私の一番感じたことなんです。ガーンとした音でなくすっきりした音ですから、聞いていますと、力強さ、むりやりに音を出しているといった固さが何にもないです。あれだけ見事なテクニックでもってあれほど流暢に弾き、あれほど音がそろっていて、いわば力でもってガリガリ弾きまくる……ということが絶対に感じられない。音楽全体の印象というのが、積極的に外へ向いているのではなく、内の方へ、ひっこんで……迫力をもって外へ押すというよりも、まん中ぐらいで静かに留まっている……そんな音の感じであったのです。ですからブラームスの2番のコンチェルト……これは1番と違って大変美しい、色彩に富んだ曲でありますから、全くうってつけで……。

ブラームスコンチェルト2番

ところで私、去年ヨーロッパへ行った時どういいう訳かシシリー島へ遊びに行ったのですが、シシリー島のヤシナ海峽を渡ったところにタオレミナという小さなイタリアの避暑地があります。山にかこまれた、海岸なんですけれど、とっても風景の美しい、年中花が咲きみだれていてヨーロッパでも最も美しい所なんです。

そこでブラームスが2番のコンチェルトを書いたという記録が残っているんです。しかもあの第3楽章ですね。あの3楽章、例のチェロのソロの出てくる所ですが、あの美しいブラームスの音色は、今私の申しましたようなルビンシュタインのあのようすがすがしい透き通った明るい音色でなかったら、あの感じは出てこない、すなわちタオレミアの美しい印象をブラームスは彼のコンチェルトの第3楽章に書いている。そしてドイツへ帰って完成したのであります。なんと美しい、まるで絵を見るような、印象派の絵を画くように書いている、そしてルビンシュタインはそれを印象派の絵を見るように弾いている……と驚きました。

チャイコフスキーのコンチェルトにしたって、そうなのであります。普通あの曲はバリバリ弾く人が沢山ありますが、そして別の色あいを出す人が沢山ありますが、当時においてはあのチャイコフスキーのコンチェルトを……あの曲は、だいたいテクニックを見せるガンバリ型のコンチェルトなんです、それをあのようアカ抜けて弾いたピアニストはないと思いました。特にあの2楽章はスケルツォのようになっていて、オーケストラがメロディを、ピアノが、パッセージばかりを弾いていてそれに味をつけている所の協奏曲2楽章なんです、あそここのアルペジオを彼ほどスキッと弾いた人はいない、やっぱり美しい音！これが私の2つを聞いた印象でした。なんとという現代的な音色の彩やかな人だろう……というのが私の第一の印象でした。

#### 1970年来日

ただ、そのころは彼は少し気取ったことをやり、それが気に入らなかったんですが、近ごろは大家になったせいか、そんな気取ったこともやりません。だんだん落着いてきて、今日ではますます洗練の極地にあります。したがって、この間、えーまた忘れちゃった（といって本をめくられる）1970年、84才の時、日本へ2度目にまいりまして、独奏会をやったりコンチェルトをやったりして非常に好評だったのですが、ことに若い時のルビンシュタインを聞かれた方は少いですから初めて来日したようなものです。大変日本の方、感心なさいました。その美しい音色はそれでちっともくずれないばかりか、増々洗練の度を加え、さらに鮮やかになったということは、非常にはっきりわかりました。

けれどこの時私、思ったんです。この人は音楽を弾いているのだろうか、あるいはピアノでいう音でもって絵を書いているのだろうか……そのくらい外面的な音の効果は非常に美しいのであります、あまりに洗練され、濃過されてしまったためかもしれません。彼のショパンもベートーヴェンも、心の底に残る感情的なものがどうも薄いのです。

やっぱりそういうものは、音楽家とすれば、別の手段、別のセールスでもって弾かないと、そういうものは心の底に残ってこない……と思うんです。彼は、いわば完璧の境地だと思います。（14頁につづく）